

SANZUI vol.07_2015 spring



「
十
」
レ

レ
十
」
特集



SANZUI vol.07_2015 spring

CONTENTS

「SANZUI」は、実演芸術のあらゆる魅力を伝えます。
実演芸術に触れた感動が水の流れるように
人々の身体の中に深く浸透し、潤し、育みますように。
そんな思いを込めました。
<http://www.cpra.jp/sanzui/>
(バックナンバーの閲覧・プレゼントの応募はこちらから)

公益社団法人 日本芸能実演家団体協議会
実演家著作権隣接権センター(芸団協CPRA)

02-11 特集 ホレボレ

コクーン歌舞伎×いとうせいこう

Noism×松永大司

椎名林檎×エドツワキ

太鼓芸能集団 鼓童×田中要次

12-13 美匠熟考

作詞 永六輔 作曲 中村八大「上を向いて歩こう」の譜面
舞台「放浪記」カフェー女給エブロン

14-15 カンゲキのススメ「能」

16-17 裏舞台という名の表舞台
「レコーディング・ミキシング・エンジニア」
吉田 保

18 実演家ゴヨータシ

19 ひとことください / 藤岡 弘、

20 若き実演家の未来 / 岩佐美咲 (AKB48)

21 SANZUI ぼっしょん
雲南市民劇

22 エッセイ
岡崎忠彦

24-29 ロングインタビュー
郷ひろみ

特集



惚れ惚れ

特集



青春の頃、誰もが通る「惚れ惚れ」という道がある。
憧れのアイドルやアーティストに夢中になって、
その姿や音楽、パフォーマンスが、寝ても覚めても頭の中から離れない。
しかし、大人になっても、「惚れ惚れ」している人がいる。
舞台の上の演者を見つめて、うっとりして、ぼんやりして、
目がハートマークになっている人がいる。
歌い、叫び、そして、その「惚れ惚れ」という思いは、
人生に若さや輝きを与え、力強く生きるパワーになっている。
「惚れ惚れ」って、素晴らしい。

コクーン歌舞伎

東京・渋谷のBunkamura内の劇場、シアターコクーンで行われる歌舞伎公演。初演は1994年。1996年以降は串田和美が演出を務め、古典歌舞伎の演目を新たに演出している。本水、本泥の使用やポップミュージシャンの起用など話題を呼んでいる他、客席には座布団の「平場席」が設けられるなど、現代の劇場で歌舞伎公演の雰囲気味わえる。2014年上演の『三人吉三』は、シネマ歌舞伎として映像化され、本年6月27日(土)より公開される。

意外性に満ちた演出 新しいことに挑む、コクーン歌舞伎

いとうせいこう (作家・クリエイター)

コクーン歌舞伎では『佐倉義民傳』のお手伝いをさせていただいた。義太夫節での詞章をすべて韻文にし、ラップとしてリズムに載せるという試みの担当であった。妙に目新しいことをやったイメージがあるが、当時何回か書いたように歌舞伎は音楽劇なのでその時代ごとに流行した節を積極的に使ったのである。その意味では私たちはヒップホップ節を歌舞伎に取り入れただけだ。こうした「伝統の原則に忠実であることで逆に新しいことに挑む」姿勢がコクーン歌舞伎の基本になっていると思う。公演時はよく大部屋にいた。役者のラップを修正するためである。座付き作家の気分を存分に味わわせてくれたのもコクーンだ。

いとうせいこう 1961年、東京生まれ。早稲田大学法学部卒業後、出版社の編集を経て、音楽や舞台、テレビなどの分野でも活躍。



公演名: NEWシネマ歌舞伎「三人吉三」6月27日(土)公開
監督: 串田和美 出演: 中村勘九郎、中村七之助、尾上松也 制作・配給: 松竹株式会社 Photo / Akio





見る価値のある舞台とは、 まさしくこれだ

松永大司 (映画監督)

鍛え上げられたダンサーの身体は、ロボットじゃないかと思うほど正確に、大胆に動く。あるときは、息つく間もなく俊敏に動き続けるストイックさに圧倒され、あるときは、無駄なものが削ぎ落とされた神秘的な世界に惹きこまれる。振付・演出する金森穂さんのボーダーレスな発想、徹底的な追求。彼の闘う姿勢には、感化されっぱなしだ。

松永大司 『ウォーター・ボーイズ』(01)などに俳優として出演。その後、映画監督として活動。本年6月に監督・脚本を務める『トイレのピエタ』(RADWIMPS野田洋次郎初主演/新宿ピカデリーほか)が公開予定。



Noism (ノイズム)

リューとびあ新潟市民芸術文化会館が、舞踊部門の芸術監督に金森穂を迎えたことで2004年に設立された、日本初の劇場専属のダンスカンパニー。新潟を拠点として、日本国内ツアーをはじめ、これまでに海外8カ国11都市でも公演を行っている。第8回朝日舞台芸術賞舞踊賞受賞。



リビドーと芸術の昇華は 年を追うごとに高みに。

エドツワキ (イラストレーター)

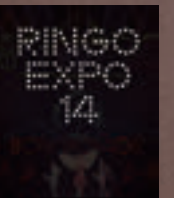
椎名林檎さんと初めてお会いしたのは10年ほど前か。以来、林檎さん、東京事変のショウに足を運んでは、圧倒され続けている。自分の100の目と耳を凝らし、官能の一挙手一投足を追い、場を支配する歌声を浴びる。リビドーと芸術の昇華は年を追うごとに高みにあり、膨大なエナジーを我々の頭からつま先、細胞のひとつひとつにまでくまなく放射し、彼女は去ってゆく。昨年11月のアリーナ、大きな翼を蓄え、ツインの一角嬢を従え、長いストラップでギターを弾き歌う姿。そこで果てたのは自分だけではあるまい。

エドツワキ 1966年広島生まれ。イラストレーター、デザイナー、画家。国内外のモード誌、ブランド、広告等で数多くの女性の肖像を描く傍ら、アパレル、抽象絵画、ライブペインティング、陶芸、文筆など行う。



椎名林檎

福岡出身。98年デビュー。99年の「無罪モラトリアム」、翌年の「勝訴ストリップ」とアルバムが立て続けにミリオンセラーを記録。04～12年はバンド東京事変でも活動。2008年 映画『さくらん』で第31回日本アカデミー賞 優秀音楽賞、2009年 芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞。複数のアーティストや舞台、映画への楽曲提供も行っている。昨年末開催されたアリーナツアーの模様を収録したDVD&Blu-ray『林檎博'14-年女の逆襲-』が好評発売中。





緊張、抱腹、興奮！

田中要次 (俳優)

言葉を必要としない舞台芸術にはいつも唸られます。故にグローバルであり、世界中の人々と繋がる事が可能なのです。以前にテレビ放送で「鼓童」と「ブルーマン」のコラボレーションを観て、興奮したのを忘れません。彼らが貫いてきたスタイルは実に見事だと思います。スティックに和太鼓を演奏するだけではなく、色々な表現要素を巧みに取り入れて、観る側を楽しませてくれます。次は何を見せてくれるのか予測が出来ないから目が離せません。緊張と抱腹と興奮が三つ巴となって、常に化する「鼓童」のステージ。何と言っても、あの太鼓のナマ音には病み付きの可能性が あるよっ！

田中要次 (BoBA/俳優) 国鉄、JR東海職員を経て、照明、録音助手、付き人などを経験。スタッフ兼業でキャリアを積む。テレビ東京系ドラマ「不便な便利屋」出演中。



太鼓芸能集団 鼓童

佐渡を拠点に、太鼓を中心とした伝統的な音楽芸能に無限の可能性を見だし、現代への再創造を試みる集団。1981年、ベルリン芸術祭でのデビュー以来、47か国・5,500回を超える公演を行っている。1988年からは新潟・佐渡の市町村と共に国際芸術祭「アース・セレブレーション」を開催。今年6月には「打男 DADAN 2015」東京公演が行われるほか、2012年に就任した芸術監督・坂東玉三郎氏演出の「鼓童ワン・アース・ツアー2015～永遠」全国ツアーもスタート。

中村力丸
(音楽プロデューサー)
Nakamura Rikimaru

作詞 永六輔 作曲 中村八大
「上を向いて歩こう」の
譜面

1961年7月21日、父のリサイタルで初めて上演されたときの記録が、この譜面に遺されています。永六輔さんと父による共同作業の結晶は、半世紀を超えて、聴かれた方、歌われた方、演奏された方の気持ちに寄り添いながら、新たな生命をいただいています。

小さく書かれた「ウラ声入るやつ」を、弾けるような若さと真っ直ぐな魅力で表現された坂本九さんの歌声も、絶えることなく流れ続けています。そしてこの歌の創作や、その後の世界に向けての展開に係わっていただいた音楽人の夢も、現在に受け継がれています。

音楽を記録・再生する技術がどれだけ発達しても、音楽は刹那にしか存在しないものです。その刹那にかけた思いと、だからこそ未来に渡って歌い継がれてほしいという願いを、この譜面が伝えてくれるように思います。

協力:株式会社八大コーポレーション

写真は冊子版でお楽しみください。



協力:東宝舞台株式会社

三間(記者)
Sanken

舞台「放浪記」
カフェー女給エプロン

女優、森光子の名とともに語り継がれる名舞台「放浪記」は奔放な生涯を送った作家、林芙美子がモデルだ。代表作の言葉を引きつつ、菊田一夫が自分の知る芙美子を芝居の中で生き直させた作である。女優はこれを2017回も演じつづけた。菊田は「お芙美さんは嫌われていたんだ」と常々口にしていたが、性格の剣呑さは生きる必死さが生んだものであり、それを全肯定するために台本は書かれた。

第2幕第1場のカフェー「寿楽」の場面で、女給の芙美子が着るのがこの割烹着。お盆をふりまわし、にぎやかに踊る場面は「放浪記」の中でもひととき印象的だ。着物の上につける純白のエプロンは昭和初年頃、モダンの象徴でもあったのだろうか。が、白をまとう女たちはどす黒い貧窮にあえいでいた。ひらひらと舞う白い布には悲しみが映っているようにも思えるのだ。

豪華な着物に面をつける能。「ややこしや〜」でよく知られる狂言。この能と狂言を合わせて「能楽」と呼ばれています。能は悲劇、狂言は喜劇ともいわれ、多くの能楽公演は、この二つがバランスよく組み合わせられ楽しんでいます。伝統という形式の中で、すべてガチガチに決められていると思われがちな能。実は、舞台上でジャズセッションのような掛け合いが生まれたりするほどダイナミックな面もあります。実際に触れてみれば、現代の私達も十分に楽しめる要素がいっぱい！今回は、難しいと思われがちな能にフォーカスして、リアルに公演を観に行くためのポイントをご案内します！

まずは迫力のある「鬼」から！？

観てみたいとは思っていても、どれを選べばいいかわからない…。そんなときには、演目のジャンルをチェック。能にはいろいろなタイプの演目があり、大きく「神・男・女・狂・鬼」の5つに分類されています。その中で初心者でも楽しみやすいのは「鬼」のジャンル。動きが大きく、迫力ある舞台が繰り広げられます。また、物語性の高い演目が比較的多い「狂」のジャンルも、ストーリーの展開が楽しくお勧め。5つのジャンルは、神を「初番目物」、男を「二番目物」、…鬼を「五番目物」と書かれている場合もあるので、ご確認を。



ストーリー予習で、楽しさ5倍

観に行く演目が決まったら、ネットや会場で入手できるプログラムで、予めストーリーを確認しておきましょう。さらに可能なら、それほど長くないので、演目の台詞(「詞章」といいます)を読むことにぜひチャレンジしてみてください。ネット検索で見つかる場合も多いです。美しい言葉も能の醍醐味の一つ。言葉が少し分かるだけで、舞台がグンと豊かに膨らみ、5倍楽しめること間違いなし！



美しさを求め、舞台が傾斜！？

いよいよ観能へ！幕がない能舞台は、何もかも丸見え。舞台の上に出演者が静かに登場し、準備をし、セットが組まれるところを静かに眺めるという時間から能は始まります。上演中はストーリーを追いつつ、ぜひ演者の足元にもご注目！真っ白な足袋のつま先や足の運びの美しさを鑑賞しやすいよう、舞台も前に少し傾斜しているとか。(イラストはデフォルメしてますので、悪しからず！) 簡単そうに見えて、台風の風にも負けないほどの力強さを秘めるという能独特のすり足が、舞の美しさを生み出します。ちなみに、もし途中で寝てしまっても、周りの迷惑にならない限りOKと考える能楽師やお客さんは多いので、リラックスして身を任せてみましょう。



伝統芸能こそインターネット

そもそもどこで何をやっているのかわからないという方も多いはず。それは能が「一期一会」の心を大切にしている、公演はたいてい1回限りだからなのです。そのため、実は毎日どこかで上演されているほどアクティブなのに、情報が捉えづらいのが実情。大々的に宣伝されにくい伝統の芸能こそ、まずは文明の利器「インターネット」の活用からスタートしてみましょう！参考サイトは下記リストご参照。

◆役立つサイト／能のいろはや公演情報はこちらでチェック。

・The能ドットコム(www.the-noh.com/jp/)：代表的な演目の分類がわかるほか、ストーリーや見どころもチェックできる。全国の公演情報、能楽堂リストやトリビアなど、お役立ち情報満載。
 ・伝統芸能LIVE!(www.arc.ritsume.ac.jp/lib/dentogeino/)：関西地域の公演情報が充実。 ・能楽ランド(www.nohgakuland.com/)：初めての方向けの鑑賞の手引きを丁寧に解説。

◆全国の能楽堂／多様な流儀の公演が年間を通して観られる公的施設をいくつかご紹介。このほか、私設や神社仏閣を含めると、能舞台は全国に80か所以上！

・国立能楽堂(東京都)(www.ntj.jac.go.jp/nou.html)：主催公演はリーズナブルなチケット料金で、いろんな流儀の企画を定期的開催。座席の前のモニターで詞章が表示されるので便利！
 ・横浜能楽堂(神奈川県)(ynt.yafjp.org/)：新しい試みやジャンル横断的な企画も多い。
 ・名古屋能楽堂(愛知県)(www.bunka758.or.jp/scd24_top.html)：イヤホンガイド設備あり。舞台の松の絵が描かれた「鏡板」が2つ存在し、1年毎に入れ替えられる！
 ・石川県立能楽堂(石川県)(www.pref.ishikawa.lg.jp/nougakudo/nougakudoutop.html)：能楽が盛んな金沢ならではの、定期的に公演を開催。
 ・大濠公園能楽堂(福岡県)(www.ohori-nougaku.jp/)：能公演のほか、コラボ公演などアクティブに活動。

◆かがり火に照らされる幻想的な世界「薪能」

毎年開催される全国の主な薪能を網羅しているページ。便利！ ※各公演情報は、主催者にご確認ください。www.sanseido-publ.co.jp/publ/nougaku_hdb_3_takigi_list.html

裏舞台 という名の 表舞台

多くの人たちによってつくられる舞台。
主役のまわりに視線を転じてみると、
至る所にプロの技が輝いている。
舞台を支える人に光を当てる。

STAGE 10

レコーディング・ ミキシング・ エンジニア

Recording & Mixing Engineer

吉田 保

Yoshida Tamotsu



Photo / Ko Hosokawa Text / Eiichi Yoshimura 撮影協力 / LAB records

吉田保さんは高校卒業後に原盤制作や楽曲登録の仕事に携わった。そこでスタジオに出入りして初めて存在を知ったのがレコーディング・エンジニアという職業だった。

「もともと大学で電気関係を学ぼうとも考えていたので、とても興味を持ちました」

原盤制作の仕事よりも自分には向いていると思った吉田さんは東芝音楽工業の入社試験を受け合格。すぐに録音部に配属された。22歳のときだった。

「1968年。当時はまだ2チャンネル同録の時代ですから2つのフェーダーでバランスを取る聴力検査などの試験がありました」

入社してすぐクラシックやロックの洋楽レコードの日本盤制作のための仕事をした。「マスター・テープと一緒に送られてきたカッティング・データと照らし合わせて、ここはノイズがあるから修正とかの指示書を書く。オリジナルのマスターを聴けたのはとても勉強になりました。これはどうい

う録音をしていたのだろうと気になると、クラシックなどはその録音風景の写真ももらってくれと外国部に頼み、そうか、ここにマイクを立てているんだと調べました」

まだ海外の情報が少ない時代、試行錯誤で情報を得る毎日だった。

「ロックもジャズもオーケストラも、多岐にわたるジャンルのマスターを聴いたこと、そしていろんな先輩のテクニックや知識を学んだことは大きな財産になっています。この先輩はなぜここでフェーダーを動かしているのか、そうすると音はどう変わるのか、見て覚えていったんです」

人手不足の中、入社して3か月後にはレコーディング卓の前に座るようになり、見よう見まねで録音業務も行うようになった。「実践イコール勉強でした。当時は同録の時代だったので楽団が演奏する中でエコー処理や定位の調整を即座にその場でやらなきゃいけない。1曲レコーディングするの

に長くても30分の時代ですから、もたもたしてられない。アルバム1枚を1週間ですべて録音してしまう時代」

当時のいちばん印象に残っている仕事は欧陽菲菲さんの「雨のエアポート」(1971)のシングルだ。欧陽菲菲さんにとっては「雨の御堂筋」に続く、そして吉田さんにとっては、はじめての大ヒット曲となった。

「これは本来別の人が録る予定だったんですが、事情があって急ぎよやることになった。筒美京平先生の作編曲でいい曲だなあと思って録音したこの曲がヒットして本当にうれしかったですね」

その後、RVC、ソニーと会社を移り、音にうるさいミュージシャンとの仕事も増えていった。

「大滝さんたちとの仕事は印象的でした。大変でしたけど楽しいし勉強になった。大滝さんの『A LONG VACATION』や山下達郎の『FOR YOU』、吉田美奈子の

『LIGHT'N UP』は出音とアーティスト、ほくの感性が一致してすごく出来のいいものになったと思います。レコーディングの方法も多彩になって海外のミュージシャンと一緒にやることも増えた。すばらしいスタジオとすばらしいミュージシャンが一体になってそれらの作品ができました」

現在、「吉田保マスタリング・シリーズ」として、当時の名作の数々を自身でリマスタリング作業を行っている。

「あのときの音をそのまま伝えたい。ヘッドフォンをしてボリュームを上げて聴いてもらおうと当時のスタジオで鳴っていた音や空気がよく伝わると思います」

今後はそうしたリマスタリングの仕事と同時に後進に自分の持っている録音の技術やノウハウも伝えていきたいと言う。音楽を取り巻く環境は昔とは大きく変わっても、音楽の価値は変わらない。いい音楽をいかにいい音で録音し、リスナーにそれを届けるか。その技術とノウハウを若い世代に伝えていくのが今後の目標であり、使命なのだろう。

PROFILE 吉田保(よしだ・たもつ)

1946年埼玉県生まれ。1968年、東芝音楽工業(現EMI)に録音エンジニアとして入社。その後、RVC、CBSソニーなどのスタジオにレコーディング・ミキシング・エンジニアとして携わった後、独立してサウンド・マジック・コーポレーションを立ち上げる。大滝詠一、山下達郎など、音にうるさいアーティストに重用されるエンジニアとして内外で注目される。近年はリマスタリング・エンジニアとしても活躍し、ソニー・ミュージックダイレクトから「吉田保リマスタリング・シリーズ」をリリースし好評を得ている。実妹はアーティストの吉田美奈子。



吉田さんがレコーディングに携わった作品。左から欧陽菲菲「雨のエアポート」、大滝詠一「A LONG VACATION」、山下達郎「FOR YOU」、吉田美奈子「LIGHT'N UP」
ジャケット提供/左からユニバーサルミュージック、ソニー・ミュージックレコーズ、アリオラジャパン、ソニー・ミュージックダイレクト

銀え塔

昭和30年創業

シチュー・ビシタンの店



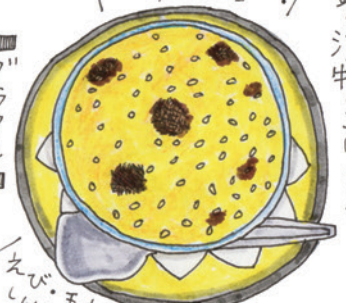
器が土鍋のシチュー。お箸で切れるお肉に感動！
ビシタンのままテーブルに。

■シチュー■

ミニセット

がオススメ！

名物のシチュー・グラタン
小鉢・漬物・ごはんのセット。



スポンジを入れるとサクッと音が！

■グラタン■

三代代で通うお客さんがいっぱい。ゆるゆる食べて納得！
私もこのシチューのファンになら。お肉がゴロゴロ入っているのが、これまた、うれしい♡
歌舞伎座も近いので役者さんからの出前注文もよくあるそう。

歌舞伎役者御用達



元質屋跡のお店。蔵の扉が残る店内。質屋だった名残を確かめてみる。置でシチューをいただくなんて、なんとも粋だ。



*銀え塔
東京都中央区銀座四十三十六
電話 03-3541-6395

実演家ゴヨータシ

Text: Illustration / Yuka Kubo

しろたえ

昭和53年創業

西洋菓子店

訪れた日は平日の午後。空いていると思いきや、持ち帰りのお客さんはもちろん、喫茶スペースも賑わっていた。
男性客もいて、コーナーにシークリームの組み合わせで会話を楽しんでいた。

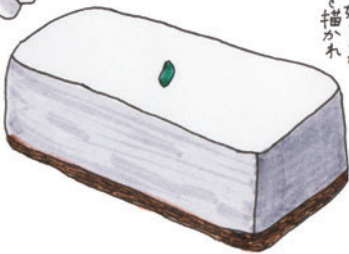


TBSが近いので「業界人が来ること多いそう！」

*西洋菓子しろたえ赤坂
東京都港区赤坂四一四
電話 03-3568-6190



■シークリーム■
やわらかい生地に優しい味のクリームがたっぷり。タチに売られることも。ご注意ください。



■レアチーズケーキ■
懐しく、甘さ控えめ。濃厚なのに、後味さっぱり。差し入れにも大人気！



お茶のロゴがトアの取っ手に！
オーナーの味さんがこのロゴを描かれたそう。

SIROTAÉ

小ぶりなカワイイ椅子♡



喫茶スペースは二階。山小屋っぽいインテリア。椅子や電球のカサなど、いちいちかわいくて、センスがいい。
オーナーさんの趣味らしい。



店主さんの三角巾が、お店の雰囲気になる。

ひとこと
ください

第一回
藤岡弘、

Text / Taisuke Shimadzu
Photo / Ko Hosokawa



PROFILE 1965年松竹映画にてデビュー後、71年の「仮面ライダー」で一躍ヒーローに。その後、スタントを自らこなすアクション俳優として映画界を牽引。「日本沈没」「野獣死すべし」などで主役を務める。84年、ハリウッド映画「SFソードキル」の主役に抜擢され、日本人として初めて全米映画俳優組合のメンバーとなる。武道家としても知られ、あらゆる武道に精通。世界各地の紛争地域、難民キャンプにて救援や支援活動も行っている。

大塔大塔

藤岡弘

どんな困難な状況にあっても諦めず、挫けず、まっすぐに突き進む。そんな人生に対する強い意志を「不撓不屈」の4文字に込めました。これは古来から伝わる真のサムライ魂の覚悟の現れであって、私は常にこの言葉を胸に刻み、自問自答しながら生きています。

1980年代前半。ハリウッド映画に出演するために、私は誰に頼ることなく単身で渡米しました。その時に私が決意していたのは、役者として日本のサムライ像を演じるのではなく、本質をつかんで「なりきる」ということです。そのために刀匠に特別に打っていただいた一振りの刀を携え、オーディションに臨み、主役を射止めました。

名前を「藤岡弘」としたのも、この時です。「」がないと、流されていく。「」では、終わってしまう。当時のアメリカには日本文化に対する正しい理解が欠けていて、撮影にあたって何度となくスタッフと話し合いました。「」を打つことで、私はサムライの精神を世界に伝える不撓不屈の覚悟を固めたのです。一生修行、我まだ未完成なり。故に精進し続ける。「不撓不屈」も「」も、己磨きの旅の決意表明なのです。



Photo / Kota Sugawara

歌が好き。
ずっと歌い続けたい。

岩佐美咲 (AKB48)
Iwasa Misaki

PROFILE 千葉県出身。2012年2月1日『無人駅』でAKB48初の演歌歌手としてソロデビュー。2014年1月8日第3弾シングル『栞の浦暮情』をリリースし、オリコン週間総合シングルランキング初登場1位。演歌ソロアーティストの1位は、4年5ヶ月ぶり。演歌ソロアーティストによる、デビューから3作連続TOP10入りは、39年3ヶ月ぶりの快挙!2015年4月29日待望の第4弾シングルをリリース。

ものごころついたときから歌手になりたかった。小学校4年生からオーディションを受け続け、中学1年生でAKB48研究生に合格。イベントで「天城越え」を熱唱したことが演歌歌手としての道を拓いた。「AKB48の中で『歌と言えば岩佐』と言われる存在でありたい。演歌歌手として頑張っ、歌手志望の後輩に希望を与えられたら」。Jポップとはひと味違う演歌の世界観をどう表現すればいいか、

日々勉強している。「もう二十歳になったのだから、演歌で歌われるような大人の女性らしさを少しずつ身につけていけたらいいな」。演歌歌手の先輩からは、歌だけでなく、ファンを楽しませようという姿勢も勉強させてもらっているという。「歌を歌うことが、応援してくれるファンへの一番の恩返し。演歌ファンの方にも愛される歌手になって、10年後も20年後もずっと歌を歌っていきたい」。

最近色々な公演のフライヤーが面白くなってきている。ここでは5月から8月に上演される、劇団・ダンス・演奏会などのフライヤーの中から、ちょっと気になるものを、本誌アートディレクターが選んでみた。



体感する能「咸陽宮」
2015年6月27日(土) / 宝生能楽堂
アートディレクション: 中村慎一
ビジュアル: 福井利佐(切り絵アーティスト)

能楽のフライヤーは、「能面」の写真が出てくるのが一般的で、古典芸能的なイメージが強いのですが、このように斬新なイラストレーションで展開してくれると、ちょっと興味を湧いてくるし、行きたくなる(そこが重要)。しかも今回は「能装束体験」などもあり、初心者にはパッチリな公演のようです。

新村則人=アートディレクター。1960年生まれ。主な仕事に資生堂、無印良品、エスエス製薬、東京オリンピック招致など。JAGDA・東京ADC会員。



東京都交響楽団 定期演奏会
2015年5月13日(水) / 東京文化会館
5月29日(金) / サントリーホール
デザイン: Glanz 大溝裕

元々、東京都交響楽団のシンボルマーク(左上にある、赤と青が重なったマーク)が好きなのですが、そのシンボルマークの色やラインを生かしながらデザインしている所が好きです。クラシック音楽に興味のない人も行きたくなるのでは? 要素が多いのに、スッキリと見えるデザイン力も素晴らしいです。



島根県雲南市。人口約4万人の町で、のべ6,000人近い観客を動員している市民劇がある。出演者も裏方も公募制。年代は小学1年生から70代まで幅広く、演劇初挑戦という人も多い。

募集の際に決まっているのは大まかな題材程度で、具体的な中身は参加者たちの意見交換の中で形になっていく。議論を通して、参加者の距離も縮む。市民劇がきっかけで雲南市に移住してきた人や、参加者同士で結婚したカップルもいるそうだ。市民劇は、仕事や学校、家庭に次ぐ「三つめの場所」になっている。

作・演出を担当している亀尾佳宏さんは、最新作「Takashi」で若手演出家コンクール2014(主催:日本演出者協会)の最終候補4名に選ばれた。本職は高校の国語の先生。演劇部の顧問として、部を何度も全国大会に導いている。市民劇に携わるようになったのは2012年から。「ここは演劇をやる機会も場所も少ない土地だから、経験や年齢を問わず広く集めてみよう」と公募制を採った。

亀尾さんは、大学時代を大阪で過ごした。島根に戻ってきたとき、もうお芝居はできないと思っていたそうだ。市民劇の参加者や高校の教え子の中にも、夢を叶えるため東

京に行きたいという子がいる。でも、「田舎ではやりたいことができないのだろうか」という疑問がずっとあった。「いろんな要因でお芝居を仕事にすることができなかった人も、お芝居をつくりたり観たりする楽しみを丸ごと諦める必要はないはず」と亀尾さんは言う。「地元においても、別の仕事をしながらでも、やりたいことができるということを見せたい」。

目指すのは、お芝居を観るために島根に来てもらうこと。「その場所に行かないと観られないお芝居が日本中にあつたら、きっと、もっと面白いと思うんです」。



エッセイ

岡崎忠彦 「curiousであり続けること」

Illustration / Asuka Kitahara

デザイナーだった私が故郷の神戸に戻り、ベビー・子ども服の仕事始めて12年、経営トップに就いて5年が経った。大きな可能性を秘め、日々成長する子どもたちの洋服を作るこの仕事を、誇りに思っている。

インターネットの普及でコミュニケーションの方法が劇的に変わり、世の中はめまぐるしい変化を遂げている。10年後、15年後の社会がどうなっているのか、もはや誰にも分からない。成長過程にある子どもの可能性が未知数であるように、これからのビジネスも大きな可能性を秘めている。

さて、表題に掲げた“curious”とは、英語で「好奇心が強い」ということ。好奇心がなければ前には進めない。終戦直後の貧しい時代に当社を創業し、母親たちに新たなライフスタイルを提案した祖母は、少年時代の私によくこう言っていた。「好奇心がなくなったら終わりよ」。その言葉の意味を、今はよく理解できる。いかにおいしいワインも飲んでみなければ分からない。大切なのは知りたいという欲を持ち、体験することだ。体験なしに感動は生まれない。

知らないことは恥ずべきことではない。それが大きな力となることがある。私の会社が、新生児用の肌着を開発したときのことだ。「この世に生まれて初めての衣服」に新しい上質な素材を求め、日本の桑の葉を食べて育った蚕の繭で作った100%国産シルクを使うことにした。繊細な素材だが、繰り返し洗って使える丈夫さがなければいけない。何度も試験・改良を重ね、2年半がかりで納得いく商品を作ることができた。開発に協力してくれた着物屋の主人に言われた。「シルクのことを知らないから無茶ばかりいう」。まさにその言葉通り、「知らない」ということが不可能を可能にしたのだ。

生きていく上で、curiousは最大の武器となる。新しい人に出会い、新しいアイデアや情報を取り入れ、本物に触れる喜びを味わおうとする限り、人も組織も成長を続けていける。そう信じている。

株式会社ファミリア代表取締役社長。1969年生まれ。甲南大学経済学部卒業。California College of Arts and Crafts., Industrial Design科卒業。BFA。Tamotsu Yagi Designでグラフィックデザイナーとして働く。2003年に(株)ファミリア入社、取締役執行役員などを経て2011年から現職。

NEWS

芸能花伝舎がリニューアル

芸団協が運営する新宿区旧淀橋第三小学校を活用した「芸能花伝舎」では、10年の節目に大規模改修を実施。11の創造スペースの設備充実に加え、ギャラリー展示やライブが行える開放的なスペースが生まれました。

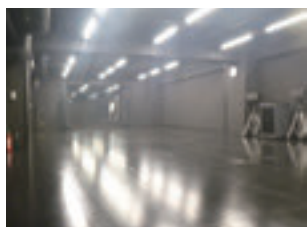
東京都新宿区西新宿6-12-30
tel:03-5909-3066 fax:03-5909-3061



台東区が、旧田中小学校2階を「たなか舞台芸術スタジオ」として活用

本年4月より、舞台芸術活動の支援を目的として、大小あわせて3つの稽古場の貸出を開始。公演に向けて最大60日まで連続での長期利用も可能です。

東京都台東区日本堤2-25-4
tel:03-5808-7327 fax:03-5808-7328



富士山が見える多摩川沿いにカルチャー・ファクトリー「たちかわ創造舎」がオープン

体育館や教室を稽古やイベント、撮影などに利用可能。10月の本格始動に向け、4月より受付を開始しています。

東京都立川市富士見町6-46-1 旧多摩川小学校
NPO法人アートネットワーク・ジャパン(企画・運営)
tel:03-5961-5200 fax:03-5961-5207



エピソード募集!

『SANZUI』は創刊より3年目を迎え、これまで、多様なジャンルの実演芸術を取り上げてきました。『SANZUI』をご覧になってのエピソード、これまで知らなかったジャンルの公演に足を運ぶようになった、もっと知りたいと思ったなど、ぜひお寄せください。『SANZUI』誌面やウェブサイト等でご紹介させていただいた方には、SANZUIオリジナルグッズをプレゼント。SANZUIウェブサイト(<http://www.cpra.jp/sanzui>)より、たくさんのお便りをお待ちしています!

PRESENT

A



郷ひろみさんサイン入りDVD『Hiromi Go Concert Tour 2014 "Never End"』1名様

2014年のツアーから、大宮ソニックシティのライブステージを全曲収録。アップテンポからバラードまで、郷さんの魅力がたっぷり詰まっています!

B



NEWシネマ歌舞伎『三人吉三』全国共通券 ペア3組

歌舞伎の名作が現代の舞台に。映像や音にこだわり抜いた、かつてない「シアトリカルムービー」が、6月27日(土)より全国の映画館でお楽しみいただけます。
<http://www.shochiku.co.jp/cinemakabuki/lineup/29/>

[プレゼント応募方法] SANZUIウェブサイト(<http://www.cpra.jp/sanzui>)からご応募いただくか、はがきに①ご希望のプレゼント②氏名③年齢④性別⑤住所⑥電話番号またはメールアドレス⑦SANZUI入手場所⑧誌面の感想を書いて「〒163-1466 新宿区西新宿3-20-2 東京オペラシティタワー11階 芸団協広報課」までお送りください。[締切] 8/31(月) 9/6(22)(月) (必着)
*当選の発表は、プレゼントの発送をもって代えさせていただきます。



編集後記

この4月の人事異動により、途中からではありますが、本誌の編集に加わりました。テレビやラジオ、CDやDVD、インターネットなどメディアを通じて実演に触れることがほとんどで、コンサートや舞台などで生の芸能実演に触れる機会は、年に数回ほど。触れるジャンルも、学生の頃に慣れ親しんだものや最近流行りのものと、どちらかと言えば、実演芸能には疎い自分。そんな自分が打ち合わせに参加すると、知らない言葉が飛び交い、インターネットのお世話になることもしばしば。その一方で、新たに知ることもあり、興味がそそられることもありました。誌面を通じて、実演芸能に携わるすべての人々の活き活きとした姿を、一人でも多くの読者に伝え、メディアを通じて得られるものとは違った魅力が伝えられる一助となるよう、精進して行きたいと思います。(君)

WEBサイト: <http://www.cpra.jp/sanzui>
Facebook: <https://www.facebook.com/sanzui.news>
Twitter: @SANZUI_info

発行:公益社団法人 日本芸能実演家団体協議会
実演家著作権センター(芸団協CPRA)
発行日:2015年5月1日
発行人・編集人:松武秀樹(芸団協常務理事・芸団協CPRA法制広報委員会副委員長)
編集顧問:大笹吉雄(演劇評論家)
編集:芸団協CPRA法制広報委員会SANZUI編集プロジェクトチーム
上野博(音制作)、丸山ひでみ(PRE)、鈴木明文(音事協)、井上滋、榎野睦子、君塚陽介、大井優子、小泉美樹(芸団協CPRA)
アートディレクター:新村則人
デザイナー:庭野広祐(新村デザイン事務所)
コピーライター:二藤正和
協力:公益社団法人 日本俳優協会、芸能花伝舎、東京オペラシティ、一般社団法人 日本演出者協会、東京芸術劇場

日本音楽著作権協会(出)許諾第1504552-501号
LIVIN' LA VIDA LOCA Words & Music By Robi Rosa and Desmond Child ©1999 By DESMOPHOBIA and A PHANTOM VOX PUBLISHING
All rights reserved. Used by permission. The rights for Japan assigned to FUJIPACIFIC MUSIC INC. Print rights for Japan administered by YAMAHA MUSIC PUBLISHING, INC.

芸団協・実演家著作権センター(CPRA)とは

CPRAは実演家の権利処理業務を適正に行うための専門機関として、公益社団法人日本芸能実演家団体協議会(芸団協)と関係団体の協力により1993年に発足しました。レコードやCDを放送で使ったり、レンタルしたり、テレビ番組をDVD化するなどの権利処理と使用料等の徴収を行い、委任権利者に分配しています。それに留まらず、広く実演芸術の円滑な流通と権利の擁護を目的として幅広い活動を展開しています。<http://www.cpra.jp>



郷ひろみ

Go Hiromi

Text / Makoto Hasegawa Photo / Ko Hosokawa
Hair, Makeup / KUBOKI(Three Peace)

ジャパニーズ・ポップスのど真ん中を行くんだって
吹っ切れてからは怖いものはないですね

心にサーモスタットをかけず、
温度を上げていくことが大切

名前の「GO」という響きは郷ひろみさんの音楽に向かう姿勢を的確に表しているのではないだろうか。もっと前へ。もっと先へ。70年代から現在までジャパニーズ・ポップスのど真ん中を歩みながら、今もなお輝き続けている。この秋には60歳を迎え、100枚目のシングルも予定されている。ライブでは歌って、踊って、話して、観客を惚れ惚れさせる。このパワーは一体どこから来るのだろうか？

——ステージに立つうえで心がけていることはありますか？

1本1本のステージ、1曲1曲の歌を大切に、最善を尽くしてパフォーマンスしていくことですね。なぜそうするかというと、客席には間違いなく僕よりも優れた人が観ているに違いないと思うからです。自分は総合点はそれなりに高いかもしれないけれど、僕よりも歌が上手い人がいる、僕よりも動きのいい人はいると常に思っている。驕ってはいけない、手を抜いてはいけないと肝に銘じてます。

——40数年やり続けて、今も進化し続けているのがすごいと思います。

僕は変化していかないと、進化はないと思ってるんです。変化の先には進化はない。毎年行うツアーの中でいかにして今までの違いを見せるか。その変化の積み重ねが進化に繋がっていくと考えています。

——変化自体はどうやってもたらされるものなのでしょうか？

日々の積み重ねが基本ですね。練習して100パーセント出来たと思ったから、普通はそこで終わりますよね。でも実は出来たところから勝負なんです。歌にしても、やればやるほど、隙間が見えてくる。これは100をやった人間じゃないと見えてこないもので。100をやる過程で不十分どころが見えてくるのは当たり前。100

0をやってそこからさらにやり続ける、と必ず隙間が見えて来るんです。その隙間を埋める作業を出来るかどうか勝負。それは僕は何年前に知りました。これは終わりが無いんだなって。

——郷さんの成長への強い意志はどこから来るのでしょうか？

自分はまだまだだという意識があるからでしょうね。それと、心にサーモスタットをかけないようにしているからでしょうね。そうすると、モチベーションの温度を上げていける。僕自身、自分の人生の成功は60代から始まる、それからの10年間がベストになっていくだろうなと思っていました。根拠もありません。成功とは多分、もがいて苦しむことを続けてきた人間しか手に出来ないものなんだろうね。自分ももがき苦しみながらここまでやってきたので、やっと成功へのスタートラインに立てた(笑)ところだなと思っています。

100枚目のシングルも 自分の中では通過点のひとつ

——著書『NEXT』の中で「曲との出会いが自分を育てた」と書かれていますが、曲に育てられるというのは具体的にどういうことでしょうか？

誰でもそうですが、デビューして2、3年たつと、まわりのことが見えてきて、自分自身のこと少しは客観的に見えるようになってくるんですよ。僕にもその時期が来て、自己分析したら、これはひどいなと(笑)。歌もダンスも自分が思い描いているイメージからはほど遠かった。なんとかしないといけないって気づきがあった中で出会ったのが筒美京平先生からいただいた『よろしく哀愁』でした。この曲をしっかりと表現出来る自分にならないといけないと思いました。

——ターニング・ポイントで様々な曲と出会ってきたというわけですね。

——そうですね。『お嫁サンバ』と出会った時はメロディをいただいて素晴らし

い曲だと思って、その後、歌詞が来たら、"1・2・3バ、2・2・3バ"で、なんだ、これは？って(笑)。

——確かに、あの歌詞はインパクトがありますね。

プロデューサーに自分が抱いた疑問をぶつけたら、「これはいつまでも歌い継がれていく歌になりますから」って。そんな先のことはどうしてわかるんだらうと思ったんですが、「この歌を明るく歌えるのはあなたしかいない」と言われて、納得して歌って、出来上がったのが『お嫁サンバ』。その経験を後に活かすことも出来ました。

——というところ？

『GOLD FINGER '99』という曲と出会った時、日本語詞を康珍化(かんちんけい)さんに書いていただいたんですが、最初は「ACHICHI ACHI」の後は英語の歌詞が入っていたんですよ。『お嫁サンバ』の経験があつて、キャッチーということが自分の中で消化されていたので、康珍化さんに「"ACHICHI ACHI"を連発させていきましょう」と提案して、あの形になりました。これまでに99枚のシングルを出してきましたが、そこでの経験がどこかで活かされて、何年かたって振り返った時に、成長させてもらったんだと気がつきました。

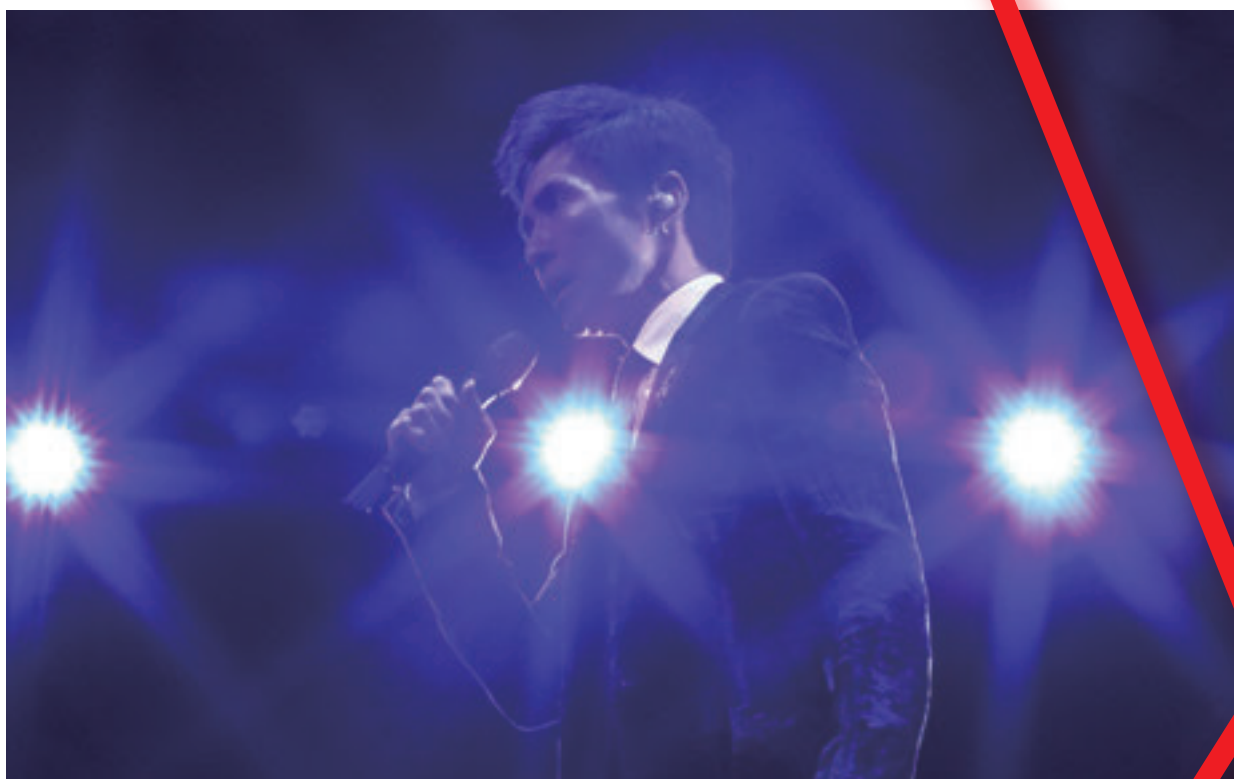
——次のシングルで100枚って、おそらく前人未達の記録だと思います。

コンスタントに最前線で活動している証しなのではないですか？

——アメリカに行って、休んだ時期もありましたが、それでも100という数字に到達出来るのは自分でも誇れることだとは思っています。でもこれはファンの人がいいたから、そして多くの人が支えてくれたからで、僕だけの力じゃないですよ。もちろん感慨深くはあるんですが、ただ僕の中では通過点と

——著書で「歌は自分の天職」と書かれています。そう確信したのは？

ある時期が来るまではなかなかそうは思えなかったんです。40代の後半な



のかな。自分自身の音楽について、吹っ切れてからですね。僕だけでなく、長く仕事を続けている方はみなさん、いろんな時代があると思うんです。画家だったら、明るい色使いになったり、暗い色使いになったり、時代によって、作風が変わっていく。同じように僕も『お嫁サンバ』の時期もあれば、バラード3部作の時期もあれば、もっとかっこいい歌を歌いたいと思つた時期もあった。そして『ジャババン』（『2億4千万の瞳—エキゾチック・ジャババン—』）って歌うのはもういいかなって時期もあった。でもどこかで吹っ切れたんでしょね。かっこいい曲は他の人に任せて、郷ひろみは歌謡曲のど真ん中、ジャパニーズ・ポップスのど真ん中を行くべきなんだなって。

——そう感じた直接的なきっかけはあったんでしょうか？

——たくさん複合的な要素があつて、自然に悟っていったんだと思います。『ジャババン』でいいんだ、"1・2・3バ"でいいんだって吹っ切れてからは、もう怖いものはないですね。

きれいに続いて終わる歌のように、人生もデイミヌエンドしていきたい

——ライブではブルース、ラテン、ジャズなど、多様な要素を取り入れた起伏のあるステージをやられています。

ライブは2時間くらいあるので、多くの自分の要素を観ていただきたいです。自分がやりたい音楽をやるということではないです。ライブは魅せる要素が大きいので、いかに楽しんでもらうかが最大のポイントですね。

——先々のシンガーとしてのビジョンはありますか？

——ジャパニーズ・ポップスのど真ん中をやるのが大前提で。その上で70歳の時にはこうありたいというものを成立させるために、今しなければいけないこと、しなくていいことの取捨選択をしていかなければと思っています。

——郷さんにとって、歌うことの魅力とはどんなことでしょうか？

歌は僕にとっては限りなくスリリングなものなんです。楽器は押さえれば音が出るけれど、歌はその時になつてみないと、どうなるかわからないところがある。体調のいい日もあれば、すぐれない日もある。でもそんなことは微塵も言えないわけですから。しかも歌には完璧はない。及第点は取らなきゃいけないけれど、満点なんてほとんどない。自分の中で大満足なんてことは4年に1回くらい。オリンピックと同じくらいの頻度ですね（笑）。しかもライブの中でせいぜい1曲。それくらい歌というのは難しい。だからこそ、ライブで歌うのはスリリングだし、モチベーションが上がるし、自分を成長させてくれるんだと思います。

——その探求の日々はまだまだ続いていくわけですね。

バラードを歌う時、最後の音をずつと伸ばすじゃないですか。ウウウウーって。長くきれいに伸び続けると、みなさん、拍手してください。でも途切れたり、かすれたり、あるいは音程が下がったら、あれ？ってことになる。だから腹筋と背筋を使って細心の神経を使わなければならない。人生も同じ。ゆつくりと最後にすーっときれいに終わっていくのが自分の人生の理想の形。それは歌から学んだことですね。いつこの世を卒業するかはわからないけれど、それまではずつと神経を使って、ある時期からデイミヌエンド（音楽記号。だんだん弱くという意味）していきたい。だからまだ自分のデイミヌエンドは始まっていないんですよ。いよいよこれから自分の成功が始まると思つていますから。

PROFILE シンガー、俳優。1955年10月18日生まれ。福岡県出身。1972年、NHK大河ドラマ「新平家物語」で俳優としてデビュー。同年8月シングル「男の子の子」で歌手デビュー。「よろしく哀愁」「お嫁サンバ」「言えないよ」「GOLDEN EYES」など数々のヒット曲を送り出し、現在まで99枚のシングルを発表。5月20日には100枚目のシングル「100の願い」をリリースする。5月27日から全国ツアーもスタート。



ライブで歌っていて、
100点満点だと思えた瞬間は
ほんのわずか。



Long Interview

Hiromi Go